最後の話。

でんでん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最後の話。

【Ｎコード】
Ｎ０８３８Ｙ

【作者名】
でんでん

【あらすじ】
突然記憶を失い、地球から転移してきた主人公。
自分はニホンという国から転移したことを知り、なぜか手に入れた超チート的能力で記憶を取り戻す、または、ハーレムを築いたり色々してしまう物語。
こっちは気が向いたら更新します。
またやってしまいましたが、後悔はしていません。
更新は「日本再興」が優先的になります。と思ったらなんかこっちに夢中になってた件について

転移してきた話。

私は目を覚ました。

私はここに居た。何時からだろう。思い出せない。

私は誰か？私はなんでここに居る？

・・・・・・・・・・・・

何も分からない。分かるのは「悪いことをしたら謝れ」とか「１＋１は２」だったり基本的な知識。

そして、私はニホンと言うところから来たと言うこと。

あと、私は大変なことに気付いてしまった。

服着てない。私は一糸纏わぬ状態・・・

神様とか来て何か助言してくれる展開？を期待したが、現実はそんなに甘くない。

誰も来ない。１０分待っても来ない。

服とかあったら出てきてくれ・・・お願いだ・・・

と思ったら青い光が出てきて、服が出てきた。

あ、良かった。服が・・・ってあれ？服って何処から出てきた？

これって魔法ってやつ？

とりあえず服を着て、服は私にぴったりだった。

でも顔とかどうなってる？それにおなかが減ってしまった。何か食べたい。

出てきてくれと思った途端、またあの青い光。んでそこには鏡と食べ物。

すごい私。小鳥を呼び出すと小鳥が出てきた。
鏡を見てみると、長い金髪のかわいらしい顔（自分で言うのもなんだけど）。見たところ傷は無い。自分は自分の体を見てみる。あ、何か胸大きい。
とりあえず出した食べ物を食べる。自分には丁度いい量で、味もなかなか。
なんか眠くなってきた。でもさすがにここで寝るわけにはいけない。だから、女の子のかわいい使い魔でも召喚して、この世界を案内してもらおう。
よし出てきてください。使い魔さん。

青い光と共に、青い髪をした可愛い使い魔さんが出てきた。なんだかエルフみたい。耳とか。肌が白いし。ちゃんと服は着ていた。

「ｚｚｚ．．．」

え・・・寝てる・・・待て待て起きろ起きろ！！

「うーん・・・むにゃ・・・あっ！すいません！ご主人様。私はサラと言います。先ほどは申し訳ありま・・・」
サラは謝る。でも、別に良かった。

「別にいいの。サラの寝顔かわいかったから。それより、教えてもらいたいことがあるんだけど・・・この世界の地理とか・・・とりあえず大陸とか一番近い町を。」
私が聞く。
サラは顔を赤らめながら言った。

「この世界には3つの大陸と、沢山の島々があります。一つ目をヘスブム大陸。二つ目をアーレズ大陸。三つ目をトラペイク大陸。私

たちが居るのは、一番大きい、アーレズ大陸です。んで、一番近い町は、ヘイズの町。ここから15キロ位ですかね・・・」

考えてみる。時刻は夕暮くらい。ここから歩いたとしても5時間くらいかかるだろう。

そうしたらすっかり夜になってしまう。そうしたら何が襲ってくるか分からない。

そうしたらサラが、「いざとなったらご主人様の召喚魔法で家でも作ってしまえばいいと思いますし、必要なくなったら入れてしまえばいいんです。」

え？入れるって？サラに聞くと、

「異空間に移動してしまえばいいんです。その位だったら私も使えます。私はご主人様の力で生み出されたので、ご主人様はその力が使えるはずです。」

そうか。いろいろと道具を出せばいい。ならば話は簡単。

「じゃあヘイズに歩きましょうか。」

結局ヘイズに歩くことにした。

と歩いてみたのだが歩いてみると動きがとんでもなく軽い。早いし。じゃあ走ったら？もうお分かりかもしれない。やっぱり早い。

例えて言うのならば、サラが早すぎると言ってきたので背負ってみた状態で、１００ｍ１１秒くらいのスピードをまったく疲れずに出すことが出来る。疲れは早歩き位しかしない。

あと剣を出して軽く闘ってみたけど、手馴れたように扱えるし、一撃で大木を粉砕できる。

これには自分も驚く、いや自分で自分に呆れた。これは剣が強いのだ。と思うしかない。

サラ驚愕しすぎ。

森の中をとんでもない速さで走ると、街道に出た。さすがにここで

走ったら怪しまれる。
ところで私の旅の目的はなんだろう？
記憶を取り戻す？それともかわいい女の子とイチャイチャする？
私の記憶を奪ったやつを百倍返しにしてやるのもいいかもしれない。
こうして、私の旅が一応始まった。
そういえば名前が思い出せない。町に着くまでに決めておこう。

転移してきた話。（後書き）

やってしまいました。うｐ主は過労死する気です（何
気が向いたら更新というゆっくりさですがまったりやって生きたい
と思います。
えっと、次は、「町に来てみたら何故か知らないけど町が壊滅して
いた話。」です。

町に来ていたら何故か知らないれど町が壊滅していた話。

あらすじ［ここまでの話を１５文字以内で答えろ］

転移。主人公マジチート。

私とサラはヘイズの町に向かっていた。
もちろん歩いて。空は暗くなってきたけれど、とりあえずランプを出していたので大丈夫。
私はとりあえずサラに言いたいことがあった。

「ねえサラ？こんな事言ってしまって済まないんだけど・・・」

「何ですかご主人様？」
サラが言う。
私は言った。

「私には・・・過去の記憶が全く無い。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ご主人様が言った言葉・・・
「自分は・・・誰なのか分からない・・・気付いたら、ほとんどの記憶を無くして、ここに居た。何故かここに来たのかも分からない。もちろん、私の力なんて気付いてなかった。最初に裸で飛ばされていたから、慌てて服は何処だとか言ううちに、この力に気付いた。」
超適当にまとめるとこんな感じだろう。
普通の人なら、まず信じることは無い。笑うだろう。

でも、本当だった。私を生み出し、さっきだってランプを何も無いところから取り出したし、私を背負ってとんでもない速さで軽々と走ったし・・・
それで、私に頼んできた。いや、主人に仕えるのが使命、従わないわけに行かなかった。
「こんな主人でも、一緒に居てくれる？」
私は・・・心の底からあの人と居たいと思った。私が、あの人を助けないといけない。
だから、笑顔で、「はい！」と答えた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私はサラに色々と話した。記憶の事、自分の事・・・
それに、自分がサラを頼ってしまうことも、迷惑をかけてしまうことも。
そして、私は彼女に聞いた。

「こんな主人でも、一緒に居てくれる？」
サラは笑顔で答えた。

「はい！」
私は嬉しかった。こんな私でも、信じてついてきてくれる人が居ることに。

「ありがとう・・・本当に・・・でもね・・・私の名前まだ決まっていないんだよね・・・
全然思いつかないし・・・なんかいい案無い？」
サラが慌てる。

「・・・名前・・・ですか・・・玲奈とかどうですか？」

玲奈か・・・決めた。いい名前だし。
苗字は・・・まだ決めなくていいや。
「ありがとう。私って本当にサラに頼りっぱなしだね・・・あと、私の事は玲奈って呼んで。」

「えっ・・・さすがに呼び捨てで呼ぶのも・・・さん付けでもいいですか？」
まあこれ位いいだろう。
それは別として、サラに聞いてみる。
「別にいいけど・・・それにしてもおなか減ったね・・・後どれ位？」

「あと少しって・・・ああ、あそこです。何か明るいですね・・・祭りでもやってるんですかねぇ・・・」

確かになんか明るい。
だがこの世界の文明は現代レベル位じゃない。せいぜい中世のレベルだ。
どう考えてもおかしい。明るすぎる。
「サラ・・・急ぐよ。何かおかしい。」

「・・・えっ・・・はい！」

嫌な予感は的中した。ヘイズの町は燃えていた。
ここに何があったのか？
結界の呪文で2人の身を守り、町を捜索する。
町の中は、目を覆いたくなるような惨状だった。
町の建物は、ほとんど焼け落ちており、ところどころ死体も見える。
生きている人は、ほとんど居なかった。

だけれども、一人の人影を見つけた。歩いてくる。
「サラ・・・走るよ！」
私たちがそこに着いたとき、彼女は倒れていた。
外見は１４．１５歳位で、黒いポニーテール。
「大丈夫？」
私は彼女に問いかける。
小さな声で彼女は答える。
「・・・姉・・さ・・んを、姉・・・さんを助けて・・・」
「どこにいるの？何処？」
「東に・・・ある赤い・・・看板の・・・宿屋・・・姉さんは・・・
逃げ遅・・・れた・・・」
「サラ、治癒魔法で彼女を！私はあの子のお姉さんの所へ！」
「はい！」
サラが答える。
間に合ってくれ。無事でいてくれ・・・
そのことを祈って私は走る。

町に来ていたら何故か知らないれど町が壊滅していた話。（後書き）

とりあえず２話目アップ。
次号「意地でも人を助け出す話。」
とりあえず登場人物の紹介でも。

玲奈
誕生日　謎
年齢　１７歳位
身長　１６８ｃｍ
体重　「粉々にされたい？」
好きなもの　女の子　サラ　サラの寝顔
嫌いなもの　人の話を聞かないやつ　記憶を消した関係者全員
記憶を消され異世界に転移したと思われる。
かわいい子大好き。糞チートな能力を持つが本人も気付いていない。
金髪でかなりの美人。

サラ
誕生日　７月２１日（玲奈が召喚した日）
年齢　実年齢０歳　外観、精神年齢１６歳
身長　１５３ｃｍ
体重　「消されたいの？」
好きなもの　玲奈　仲間
嫌いなもの　玲奈を邪魔するもの　人を無闇に傷つけるもの
玲奈の使い魔。玲奈によって生み出された。
こちらもかなりの美人。どちらかと言うと戦闘より後方支援の方が得意だったりする。

意地でも人を救い出す話。

あらすじ［これまでの話を１５文字以内で答えろ］

町壊滅。姉妹を救え。

サラ視点

おかしいと言われ、走ってきたが、ご主人様の言うとおり町が燃えていた。

モンスターの侵攻から町を守る門は焼け落ち、沢山の建物からは火が。

町の内部からは人のうめき声。さすがに放って置く訳にはいかない。

門に入って内部を捜索しようと思ったが、ご主人様に待てといわれた。

ご主人様と言ったら、軽く怒られた。あ、しまった。

でも怒ってる暇は無いと言われ、簡単な結界魔法をかけて貰った。

これは助かった。この位なら十分に防げるはずだ。

町の中心まで走る。火は燃え盛っている。建物は崩れ、爆発し、人が生き埋めになる。

こんな光景なんて見たくない。できることならご主人様の力で町を直して欲しい。

ご主人様の横顔は、見てるだけでこっちも辛くなるような、辛い顔をしていた。

その時、炎と煙の中で人影が見えた。なんとしても助けたい。

その子はこっちにフラフラしながら歩いてくる。こっちも走る。

その子の元へ着いたとき、その子はバタっと倒れた。

見るからに大やけどをしていた。
彼女は（近くに来てやっと判別できた）ご主人様にしか聞こえないような声で話した。そして気を失った。ご主人様は決意したような顔で、
「サラ、治癒魔法で彼女を！私はあの子のお姉さんの所へ！」
と言った。私が返事をするとご主人様はすぐ行ってしまった。

治癒魔法で彼女を治癒しようとする。
手のひらから優しい緑の光があふれ出す。
だが火傷には全く効いてくれない。
早くご主人様に来てもらわないと・・・

玲奈視点

東にある赤い看板の宿屋。
右に進み、赤い看板を目指す。だが見つからない。それに町は燃えていて赤かった。
それに普通は焼け落ちてしまう。
魔法で炎を吸収する。水で炎を消す。
火はかなり弱まった。だが周りは夜で全く見えない。
吸収させた炎を分解させて空中浮遊させて、松明の代わりにする。
とにかく、東へ。小さな声も失わないように。

1分くらい歩いたのだろうか。
小さな声が聞こえたような気がした。
明らかに女の人の声。それに赤い木の破片。何か書いてある。
怪しいと思い、その声のした所の周辺を浮き上がらせる。
人が浮いている。その人を抱きかかえる。
その人は驚いて気を失った。
炎は弱まったが、時間が無い。火はまた強くなっていく。

それに、彼女は、体に大火傷を負っていた。
でも、そんなこと関係ない。この子達は私たちが助ける。

サラの所に着いた時、何故か患者が増えていた。
彼女によると、治癒魔法の緑の光を見てこっちに来たそうだ。
放っておけず治療したそうだ。とりあえず歩ける位には回復したみたいなので、
郊外に避難してもらう。

問題は私たちが見つけた子達だった。
助けるなんて威勢よく言ってみたけれど、どちらも火傷がひどい。
よくこんな状況で生きてこれたなと思う。
どうやって助けるか。治癒魔法も全く効かない。病院みたいなことは出来ない。
とにかくここでは危ないので、私たちも避難する。

町郊外

町から離れたところに簡単な家を出して置く。
ベットに彼女たちを寝かせる。とりあえずいい方法が無いかサラに聞いてみる。

すると、彼女はこんなことを思いついた。
「彼女たちのコピーを作り、彼女たちの精神をコピーに移す。」
だそうだ。聞いた事もないし、成功するか分からない。
だが自分にはそれ以外の方法が思いつかないのでやってみるしかない。
青い光で二人のコピーを作り、二人の精神を二人のコピーに移してみる。

すると元のほうの体は消えてしまった。これでいいのか？と思ったが、
コピーの体で彼女たちは気持ちよさそうに寝息を立てている。
サラに大丈夫か尋ねてみると、彼女は試しに二人のほっぺたを突いたりしてみた。
すると、彼女たちはもぞもぞとベットの中で動いている。

寝顔は可愛かった。たぶん男が見たら理性が崩壊するだろう。正直私も危ない。
だって二人の美少女が無防備で気持ちよさそうに寝ているんだもん！
そのことをサラに話したら、怒られて2時間も説教された上ゲンコツされた。サラのゲンコツ痛い。
その後強制的に寝かされた。全くいろいろありすぎた1日だったような気がする。

意地でも人を救い出す話。（後書き）

えっと投稿が遅れました。
やばい。いろいろと終わったような気がする・・・
松岡〇造の「あきらめんなよ！」と言う声が聞こえてくるような気がします。
次は「目覚めたらまた怒られた話。」です。
題名でネタバレしてるかもしれません。

目覚めたらまた怒られた話。

あらすじ［ｒｙ
姉妹救出成功。

私は目を覚ました。
目を開けると、白い天井の部屋。横にはミーシャお姉ちゃんが眠っている。
ここは天国だろうか。
確か私は、町で火事にあって、火傷を負って、お姉ちゃんが私を助けるために身代わりになって、フラフラ歩いていたら二人の人が見えて、そこで歩けなくなって倒れて、駆け寄ってきたその人に何か頼んで・・・そこから記憶が無い。
なのに自分の火傷は全部直っていて、お姉ちゃんの火傷も傷も全部無くなっていて・・・ということは天国しか思い当たるところは無い。
そのとき、ニャーという声がした。その声の所には可愛らしい三毛猫が。
猫はこっちのほうに来て。体を擦り付けてくる。あれ、私猫に懐かれてるのかな。
懐いてくれた猫としばらくじゃれていると、足音が聞こえてきた。
猫は驚いてお姉ちゃんのベットの中に逃げてしまう。
ドアがノックされて人が入ってくる。青い髪をした綺麗な女の人。
天使かと思ったけど、天使の羽は付いていない。
とりあえず聞いてみる。

「ここって何処ですか？天国ですか？私たちは死んだんですか？」

そしたら女の人が、

「死んだって・・・縁起でもない事言うね・・・あなた達は私たちに助けられた。んでそれよりこっちに女の人来ていなかった？あ、私はサラ。あなたは？」

「え・・・私はナーシャといいます。人は来てないけれど、猫ならそこに・・・」

「ニャッ！！」
猫が飛び出して、逃げて・・・捕まった。

「何やっているんですかご主人様・・・いなくなったと思ったら・・・」
え？この猫がご主人様？どういう事？
と思ったら、赤い光に包まれて・・・女の人が・・・

「もう！余計なことしないでよ！ナーシャと折角じゃれてたのに・・・それにサラのお説教のせいで眠れていないんだから！」
何この人人間？それとも化け物？ああ私はこの化け物の餌に・・・
そしたら化け物（？）が・・・私の頭を撫でてきて、

「別に餌なんかにしないって・・・それに私たちはあなたたちを助けたのに・・・」
と今にも泣きそうな顔で言ってくる。

「それはさっき聞きました・・・サラさんから・・・というかここは何処ですか？」

「ここはヘイズ周辺。ヘイズは昨日の火事で壊滅。私たちもたまたま通りかかっただけだから原因も不明。死者やあなた達の親族の安否も不明。生き残りは全く居ないと思う。」

私は唖然とした。大きい町ではなかった。でも、いつも暖かい人たちが居てくれて、私たちにとってはそれは死刑宣告のように聞こえた。
その時、サラさんが話した。
「とりあえず私がナーシャさんを治癒していた時に人が来ていたので治癒した位人達くらいしか確認できませんでした・・・でも・・・私たちがいなければヘイズは本当に壊滅して生き残りも誰もいない状態になっていたと思います・・・特にあなた達二人がとんでもない状態で・・・」

「確か火傷に治癒魔法が効かなかった・・・体の大部分を火傷が占めていた・・・だっけ？ごめんなさい。私は玲奈と言います。」
玲奈さんは続ける。
「おそらく治癒魔法が効いたとしても、すでに体内に侵入していた病原菌や、どう考えても普通の方法では助からないのは確実だった・・・」

「で、そんな状態から私たちをどうやって治したの？」
さっきまで寝ていたはずのサーシャお姉ちゃんが聞く。

「お姉ちゃん・・・何時から起きていたの？」

「赤い光が出てきた時から目を覚ました。そこから盗み聞きしていた。」

「私は気付いてた。といっても盗み聞きって・・・」

「悪い？とっとと答えなさいよ。」
険悪なムード。

「仕方が無いなぁ・・・状況的に先ほど言ったとおり。あなた達は普通ではまず助からないから、普通じゃない方法で助けた。ただそれだけ。」

「説明になっていない。その前にあんた強そうに見えないし、こんな怪物みたいなのなんて私の魔法にかかればイチコロでしょ。」
その瞬間、空気が変わった。さっきまで温厚だった玲奈さんが、冷たい目でこっちを見ている。
「サラ、殺っていい？」

「そんな事で・・・」

「売られた喧嘩は買うよ？それに、殺しはしない。」
そう言った玲奈さんの表情が、なんだか悲しそうに見えた。

目覚めたらまた怒られた話。（後書き）

投稿遅れてすいません。結局怒られなかった様な気がするし・・・強引に戦闘パート突入。

「強引にねじ伏せた話。」は日曜日に掲載できれば・・・と思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0838y/

最後の話。

2011年11月5日03時02分発行